

聖書:ルカの福音書9章46~50節

説教:一番小さい者が

はじめに

46節に「弟子たちの間で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった」とあります。このことで思い出すことがあります。私の息子が幼稚園に通っていたときのことです。帰る時間になり、みんなで声を合わせて「先生さようなら」と言った途端に玄関に駆け出し、一番でなかったとわかると泣きながら「もう一回、『先生さようなら』からやり直して欲しい」と訴えて周囲を困らせたそうです。子どものこととして笑い話で済ませることができますが、考えてみれば私たちは常にだれが一番であるかを競い合いながら生きてきていることも事実です。

そんな世の中に疑問を感じ、仕事に疲れていた私が、教会に行き始めた頃、「一番小さい者が、一番偉いのです」というのを聞いたときは、どこかで納得する思いもありました。ではいざ自分のこととなるとどうか。「小さな者になりなさい、仕える者になりなさい」と、頭ではわかってもなかなかそうなれないのです。皆さんも悩んでいらっしやるのではないかと。ではこれはどんな意味なのか。ともに考えます。

## 1 だれが一番偉いか

### 1) 弟子たち

この弟子たちは、イエスと寝食をともにしながら、イエスがなさること、語ることを最も身近なところに見たり聞いたりしています。ですから、さぞかしきよい心の人たちだろうと思いたくなる。ところがとんでもない。だれが一番偉いか、そればかり考えていた。もっとあけすけに言うところ、隙あらば隣にいるやつを蹴落とし、踏み台にして、一番になってやる。どこかの大会社の出世競争さながらです。

どうしてなんだろう。簡単です。そこに人生の幸いがあるからと思いついてからです。イエスは、「神の国と神の義とを求めなさい。そうすればそれに加えてすべてものが与えられます」と言われ、弟子たちは聞いていたはず。聞いてはいても、この世の誘惑は非常に強い。イエスの人気があがりにあがり急上昇していけば行くほど、イエスがイスラエルの王となるのではということが現実味を帯びて来る。そうなったら、自分こそが大臣の椅子に座る。そのことばかり考えているのです。

### 2) 一番小さい者が

イエスはそのような弟子たちの心の変化に気がつき、近くにいた子どもの手を取って、そばに立たせながらこのように語ります。48節。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。あなたがた皆の中で一番小さい者が、一番偉いのです。」

ここには三種類のつながりが示されています。一つ目は子どもとイエスにつながり。二つ目はイエスとイエスを使わされた方、すなわち父なる神とのつながり。三つ目は、一番小さい者と一番偉い者のつながり。これは全部がばらばらではなく、同じことを別の視点から語り直している、そのように見ることもできます。いずれにしても、一番偉くなりたければ一番小さい者になりなさい、ひとことでまとめればイエスはそう言おうとしているのはわかります。

わからないのは、「わたしの名のゆえに受け入れる人は」というところです。もしこのひとことがなければ、まったく違った意味になってしまいます。「子どもを受け入れる人はイエスを受け入れる人です。子どもが大好きな人はイエスを受け入れる人です。そうでない人はイエスを受け入れない人です。」そんなとんちんかんな意味になってしまいます。そうすると、「わたしの名のゆえに受け入れる」とはどのようなことか。このことを正しく理解しないと、一番小さくなるとはどういうことかわからない。

## 2 イエスの名

### 1) あなたの名を語って

では、どうやって考えていくか、何か手がかりが必要です。それが49節です。「さて、ヨハネが言った、『先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。』」49節は、それまでの流れと何のつながりもなく唐突な印象があります。ここにどんな手がかりがあるのでしょうか。でもよく見ると一つの共通点がある。「あなたの名によって」です。イエスの名によって。これが手がかりになります。

あるときイエスの名前を使って悪霊を追い出していた者がいた。ヨハネはそれを見つけて、自分たちの仲間に入りなさいと誘ったのに、その人は入ろうとしない。ヨハネはその人に向かって、仲間でもないのに勝手にイエスの名前を使うとはけしからん。すぐにやめさせようとした。今の時代で言い換えれば、有名な会社のブランドを勝手にコピーして、それを自分が作った商品に張ってを売ったということでしょうか。イエスの名前を使えるのは、イエスが公認した弟子だけ。自分たちの仲間でないのなら、イエスの名前を使うことは許さない。ヨハネはそう考えて、やめさせようとした。私たちの感覚としては、ヨハネがしようとしたことは別におかしいことではない、そう考えるでしょう。

ところがイエスはこうお答えになります。50節。「やめさせてはいけません。あなたがたに反対しない人は、あなたがたの味方です。」

このことばに戸惑うのではないのでしょうか。

「反対しない」というのは、言い換えれば積極的に賛成しないということですから、そんな人が自分たちの味方だとは普通は考えません。それなのにイエスは、味方なのだという。自分のブランドが勝手に使われてもかまわない。イエスは太っ腹だということなののでしょうか。もちろんそんな単純なことではない。

## 2) イエスの名を勝手に使っていた人

そこで並行箇所であるマルコの福音書9章39節を見開くと、そこにもう少し詳しい説明があります。「やめさせてはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざを行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。」

このことばの意味を二つの立場から解説してみます。一つ目は勝手にイエスの名前を唱えていた人の立場から見た場合。その人は、最初イエスを信じてもないのに、イエスの名前を興味半分に唱えたのかもしれない。ところが驚いたことに悪霊が出て行った。そうしたらその人はどうなるか。イエスのことを悪く言えるはずはない。だからその人にやめさせる必要はない。イエスはそう言っています。そうは言われても、まだなんとなく腑に落ちません。

## 3) 悪霊から解放された人

そこでもう一つの立場、悪霊を追い出してもらった人の立場から考えてみたらどうでしょう。悪霊につかれて苦しんでいた人にとって、悪霊を追い出

した人がどんな人で、どんな信仰をもっているか、それは大切なことでしょうか。いや、そんなことはどうでもよい。とにかくこの人のおかげで、自分が悪霊から解放されたのですから、感謝しかないでしょう。

今二つの立場から見るとかなり違って見える事を話しました。ではイエスはどの立場からご覧になっているのでしょうか。悪霊を追い出した人から見ていいのか。それとも悪霊につかれて苦しんでいる人の方から見ていいのか。悪霊につかれて苦しんでいる人が大切なのです。例えばイエスを信じない人によってであろうとも、その人が悪霊から解放されることが大事。だから、やめさせてはいけなと言われる。いや、そればかりか反対しない人は味方なのだとさえ言われる。

では弟子たちはどうであったか。だれが味方だれが敵か。だれが偉くて、だれがダメな人間か。そういうことしか見ていなかった。37節までの「だれが一番偉いか」という話と、38節からの話。最初は、まったく別の話に見えました。でもちゃんとつながっていたのです。

## 3 イエスと子ども

### 1) 裏切り

つながりは見えましたが、「イエスの名のゆえに受け入れる」ということはどういうことか。まだそのことに触れていません。そこでこんどはこと同じテーマがもう一度出て来る22章を開きます。最後の晩餐と言われる場面です。22章21節から24節。「しかし見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓の上にあります。人の子は、定められたとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。」そこで弟子たちは、自分たちのうちのだれが、そんなことをしようとしているのかと、互いに議論をし始めた。また、彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論も起こった。」

イエスを裏切る者がこの中にいると聞かされたとき、弟子たちは衝撃を受けたはず。強く心が動かされたとき、普段心の奥底に押し隠していたものがぱっと出て来ます。まず最初に思ったのは、「自分がイエスを裏切るはずがない。」その次に思い浮かんだのが、だれが一番偉いかでした。自分こそ、イエスを裏切ることなく最期まで従う忠実な弟子であるのだから、自分が偉い。そう思って疑わない。では弟子たちは本当に最期まで忠実に従ったのか。イエスを三度否定したペテロのこ

とを言うまでもなく、彼らは全員イエスを裏切った。

こうしてみると、「イエスの名のゆえに受け入れる」ということばは、イエスを裏切ることとなにか関係がありそうだと気づきます。そこでもう一度9章に戻って48節の前半を読みます。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。」

## 2) わたしの名のゆえに

イエスはなぜ子どもの手を取るのでしょうか。あなたの大人の部分ではなく、子どもの部分を見なさいと言っているのではないか。あなたの子どもとは何か。イエスが十字架におつきになるときに、そこから逃げ出そうとする恐怖心。弱いことは恥ずかしい、都合の悪いところにふたをして認めようとしないうる本当の自分。ということは、「わたしの名」とはなんですか。イエスの十字架の前に立ったとき、私たちの心が丸裸にされる。自分は偉いはずだという思い込みなど、剥ぎ取られて、本当の弱々しい自分がある。それが子どもなのです。私たちは十字架の前で一番小さくされて、まるで子どものようにされていくというのです。

その子どもはどこにいるのでしょうか。47節後半。「一人の子どもの手を取って、自分のそばに立たせた。」私たちのうちにある子どもの手を取って、ご自分のそばに立たせて下さる。イエスはどこまでも私たちと一しょなのです。

こんなに弱い自分でもイエスは見捨てない。いやむしろ手を取ってくださるのなら、私たちはこの方に身を任せてることができます。

この方とともにまた歩んで参ります。